

### メンデルスゾーン：序曲『フィンガルの洞窟』作品26

ドイツの作曲家フェーリクス・メンデルスゾーン（1809～47）が初めてイギリスを訪れたのは1829年4月のこと。ロンドンで自作の交響曲第1番を披露して熱狂的な賞賛を浴びた若き作曲家は、この年の夏、友人のカール・クリンゲマン（1798～1862）とともにスコットランド高地へと旅に出る。その道中、スコットランド西岸のヘブリディーズ諸島に立ち寄ったメンデルスゾーンは、船酔いに苦しみながらもスタファ島まで足をのぼし、岸壁が波に削られてできた高さ20メートルにも及ぶ巨大な海蝕洞「フィンガルの洞窟」を見物した。序曲『フィンガルの洞窟』は、この旅行に際して受けた印象をもとに翌1830年12月に書き上げられた演奏会用序曲であり、改訂を経て、1832年5月14日にロンドンで初演された。

作品は、冒頭から鳴り響く波音を思わせる第1主題（口短調）と、中高弦楽器がそよ風のような響きを奏でるなか、ファゴットとチェロが穏やかに歌う第2主題（二長調）を中心としたソナタ形式で構成されている。この曲を耳にしたリヒャルト・ワーグナー（1813～83）が作曲家を「一流の風景画家だ」と称えたことにも頷ける、メンデルスゾーン一流の音による情景描写を堪能できる1曲だ。

### ベートーヴェン：交響曲第6番 へ長調 作品68「田園」

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が手掛けた9つの交響曲は「挑戦」や「革新」に対する強い意欲を感じさせる傑作揃いであり、後の世代の音楽家たちに多大な影響を及ぼした。本日演奏される交響曲第6番「田園（Pastorale）」は、エクトル・ベルリオーズ（1803～69）の「幻想交響曲」（1830）をはじめとするロマン派の標題交響曲の先駆けとなった作品。1808年、ベートーヴェン38歳の年に完成され、同年12月22日にウィーンのアン・デア・ウィーン劇場にて交響曲第5番とともに初演された。

ベートーヴェンは1803年から翌年初めにかけて手掛けた交響曲第3番を「英雄（Eroica）」と題しているため、本作は自身2作目のタイトル付き交響曲ということになる。しかし、この第6番「田園」で作曲家はもう一歩踏み込み、全体を当時の交響曲としては異例の5楽章構成とした上で、各楽章に音楽の内容を暗示する標題を書き記している。

なお、今日では「田園」の名で親しまれている本作だが、1809年5月出版の初版パート譜にはドイツ語で「田園交響曲、あるいは田舎の生活の思い出（絵画というよりも感情の表現）」と記されている。本作でベートーヴェンが試みたのは、単に田園の情景を描写することではなく、そ

うした自然をまなざす人間の感情、心の動きを音楽を通して表現することであった。

曲は上述の通り5つの楽章から成り、第3～5楽章は続けて演奏される。

**第1楽章**「田舎に着いた時の愉快的気分のめざめ」 アレグロ・マ・ノン・トロップ ヴィオラとチェロが5度の響きを持続するなか、ヴァイオリンが第1主題を朗らかに歌い出して始まるソナタ形式楽章。同時期に書かれた交響曲第5番の第1楽章とは真逆の晴れやかな表情で幕を開けるが、ヴァイオリンの主題が8分休符で始まり、冒頭フレーズとその後の部分とがフェルマータで区切られており、続く部分ではさっそくこの旋律の動機による掛け合いが繰り返されるなど、随所に第5番と共通する特徴が見受けられる。第2主題は第1ヴァイオリンがしなやかなフレーズを奏でるなか、チェロがのびやかに歌い出す旋律。その後は第1主題部の動機を徹底的に扱う展開部、型通りの再現部と続き、第2の展開部ともいうべき大規模なコーダで結ばれる。

**第2楽章**「小川のほとりの情景」 アンダンテ・モルト・モート 小川のせせらぎを思わせる穏やかな調べで始まるソナタ形式の緩徐楽章。コーダではナイチンゲール(フルート)、ウズラ(オーボエ)、カッコウ(クラリネット)の声も聞こえてくる。

**第3楽章**「田舎の人々の楽しい集い」 アレグロ 快活なスケルツォ楽章。はざれよいスタッカートの主題に始まり、後には狩りの角笛の響きも聞こえてくるスケルツォ主部と、推進力に満ちた舞曲風のトリオ(中間部)が交替する五部形式で書かれている。3度目のスケルツォ部分でプレストにテンポが上がり、ホルンの信号音がけたたましく鳴り響くと、途切れることなく第4楽章に入る。

**第4楽章**「雷雨、嵐」 アレグロ 刻一刻と変化する嵐の情景をピッコロやトロンボーン、ティンパニを交えてドラマティックに描き上げた急速楽章。遠雷を思わせる低弦楽器のトレモロの響きで始まり、突如として激しい雷雨となる。嵐の第2波が過ぎ去ると音楽は次第に沈静化し、まもなく楽章冒頭の主題に基づく賛美歌風の旋律が登場。フルートの上行音階をきっかけに第5楽章に移る。

**第5楽章**「牧人の歌。嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」 アレグレット クラリネットとホルンが奏でるアルペンホルン風の調べに導かれ、第1ヴァイオリンが優美な第1主題を紡ぎ出して始まるロンド・ソナタ形式楽章。全体は大きく「ABA-C-ABA-コーダ」という構成で書かれており、最後は祈りを捧げるかのような敬虔な弦楽合奏の調べと、弱音器付きのホルンによる楽章冒頭のフレーズを経て、力強いへ長調主和音の総奏で締めくくられる。

## シベリウス：交響曲第7番 ハ長調 作品105

フィンランドの作曲家ジャン・シベリウス（1865～1957）が遺した7つの番号付き交響曲の最後を飾る作品。完成されたのは今から100年前の1924年のことであり、同年3月24日ストックホルムにて、シベリウス自身の指揮するロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団によって初演された。

本作はシベリウスの交響曲のなかで唯一、単一楽章で書かれている作品であり、作曲家も完成当初は「交響的幻想曲 I (Fantasia sinfonica I)」と名付けていた。単一楽章の交響曲には、こちらも同じく作曲者自身が「交響的幻想曲」と呼んでいたロベルト・シューマン（1810～56）の交響曲第4番（1841年作曲、51年改訂）などの前例があるが、シューマン作品が伝統的な交響曲の4つの楽章を接続したかたちで書かれていたのに対し、シベリウスの第7番は交響曲の様々な要素が1つの楽章に凝縮されている点で特徴的である。

シベリウスは交響曲第2番（1902）において第3楽章と第4楽章をアツッカで接続し、続く第3番（1907）ではスケルツォとフィナーレの性格を併せ持つ終楽章を作曲、さらに第5番（1915）の改訂に際しては冒頭楽章とスケルツォ楽章を融合させるなど、自身の交響曲創作の歩みのなかで折に触れて「楽章の融合」を試みていた。ソナタ形式楽章、緩徐楽章、スケルツォ、フィナーレといった性格が単一楽章のうちに巧みに織り込まれた第7番は、そうした一連の試みの終着点に位置する傑作である。

曲はアダージョの導入部で始まる。ここでは3つのモチーフが立て続けに提示される。1つ目は冒頭でティンパニが奏でるソの音を起点に、弦楽器がハ長調の音階をゆるやかに上っていく上行音階動機。2つ目はフルートを中心とした木管楽器によって紡がれるターンするような旋律。そして3つ目は、弦楽器のトレモロの響きに伴われて木管楽器が歌う鳥の声を思わせる動機であり、9分割された弦楽合奏による清澄な調べが続いてゆく。

弦楽器の賛歌風の響きがだんだんと盛り上がり、ヴァイオリンとヴィオラが楽曲冒頭の上行音階動機を奏でると、トロンボーンソロによる雄大な旋律があらわれる。これが本交響曲の主要主題であり、楽曲全体はこの主題を中心としたソナタ形式を軸に構成されている。

その後、音楽はややテンポを速めて展開部に入る。まずは冒頭の3つのモチーフが扱われ、続いて弦楽器と木管楽器が掛け合うスケルツォ風の部分（ヴィヴァーチッシモ）となる。しばしの後に弦楽器がうねるような不気味な調べを奏で始めると、テンポはアダージョに戻り、暗い情熱を感じさせるハ短調の響きのなかで主要主題が展開されてゆく。

続いて、音楽はロンド形式風の部分（アレグロ・モルト・モデラート）へ。ここでは、牧歌的な表情の主題がエピソードを挟みながら3回奏される。この躍動感に満ちた音楽が第1ヴァイオリンのトレモロで断ち切られると、木管楽器の信号的な連打をきっかけに2つ目のスケルツォ（ヴィヴァーチェ）が始まる。この部分は、続く再現部への推移部としての役割を担っており、その末尾で上行音階動機が3回鳴り響くと、主要主題がもとのハ長調で力強く再現される。悠然とした調べでクライマックスが築かれるなか、突如としてシベリウス一流の冷たく透き通るような弦楽器の響きも聞こえてくるが（ラルガメンテ・モルト）、まもなく主要主題の断片（ホルン）があたたかく響きわたり、最後は全合奏による壮大なハ長調の終結部（テンポ I）で結ばれる。

### ショスタコーヴィチ：祝典序曲 作品96

ソヴィエト連邦が超大国としてアメリカと対峙していた時代に、同連邦を代表する作曲家であったドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～75）。彼の祝典序曲は、明快で親しみやすい響きが魅力的な、演奏時間にして6分ほどの簡潔な演奏会用序曲である。もともとは十月革命30周年にあたる1947年に書かれたと考えられているが、このときは何らかの事情でお蔵入りとなってしまった。本作が日の目をみたのは7年後の1954年のこと。モスクワのポリショイ劇場から革命37周年記念演奏会の冒頭を飾る作品を依頼されたショスタコーヴィチは、数日のうちに本作を完成。作品は11月6日ポリショイ劇場にて、アレクサンドル・メリク＝パシャーエフ（1905～64）率いるポリショイ劇場管弦楽団によって初演され、翌1955年に出版された。

曲は金管楽器による華やかなファンファーレ（アレグレット）で幕を開ける。テンポがプレストに転じるころから主部に入り、まもなくクラリネットが第1主題を流麗に歌い出す。第2主題はホルンとチェロが奏でるのびやかな旋律であり、主部はこれら2つの主題を中心としたソナタ形式で構成されている。短い展開部、再現部を経てコーダに入るとポコ・メノ・モッソに速度を緩め、冒頭のファンファーレがパンダ（別動隊）の金管楽器も交えたいっそう華やかな響きで再現される。そして最後は再びプレストに転じ、第2主題を扱いながら力強く全曲を締めくくる。

（ほんだ ひろあき・音楽評論）